

---

# 無限書庫に眠るもの

立塚静流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限書庫に眠るもの

### 【Nコード】

N0693P

### 【作者名】

立塚静流

### 【あらすじ】

無限書庫で司書長として働くユーノ・スクライアは書庫の整理中、ある本を発見する。未知の言語で書かれたその本は、彼に奇妙な体験をもたらす……。

『無限書庫業務日誌』

無限書庫司書長：ユーノ・スクライア

注釈：業務日誌と銘打ってはいるがあくまでこれは僕個人の日記に近い。

なので、情報としての精度は低いことに注意されたい。

\*\*\*

J S事件後の司書増員を機にさらなる書庫の整理を進めることにした。

まだまだ書庫は深く、そして広い。いったいいつになったら全てを把握することが出来るのだろうか？

現状でも十分情報機関として稼働しているが、やはり完璧にした  
い。

僕に出来るのはそれくらいしかないのだから。

整理開始1日目

整理は順調。やはり少々の増員といえど力になる。優秀な司書たち  
ちに感謝しないと。  
ある程度目途がついたら、新人歓迎会をやるべきだろう。まだ慣  
れていない人もいるのだし。

#### 整理2日目

かなり奥深くまで進み、整理は順調。  
話は変わるが、今日はなのはが娘のヴィヴィオを連れて来た。  
人見知りするのか僕を見てなのはの後ろに隠れてしまった。  
けれど、子供向けの絵本を読んであげると笑ってくれた。なのは  
が引き取るのを決めたのも頷ける。  
生まれは特殊だけど、まっすぐに育って欲しい、そう思った。

#### 整理3日目

奇妙な本を発見した。  
司書の1人が見つけたものだが、特殊な文字で書かれたせいか読  
めないとのこと。僕のところを持ってきた。  
だが、これには僕も首を捻るしかなかった。見たこともない文字  
で、象形文字に似ているが 違う。  
そもそも文字かどうか判別するのも難しい。  
解読するには時間がかかるだろう。一旦その本は未整理区分にい  
れ、整理を進めることにした。

#### 整理4日目

特記なし。

しいて挙げるなら、昼食後のコーヒーが少し甘ったるかったことくらいか。

まるでリンディさんが淹れた……いや、あれよりはマシか。うん、きつと。

#### 整理5日目

ちょうど区切りのいいところまで整理が進んだので、ここで一旦終了。

定時後、司書たちと親睦会を開く。新しく入って来た人たちもこの5日間でみんなと親しくなっていて、僕も嬉しかった。

地味な部署だけど、誇りを持って取り組んでくれる。ああよかった、と思える瞬間だ。

\*\*\*

ヴィヴィオとも大分打ち解け、検索魔法と読書魔法を教える。

いくつも本を読み進め、なのはが迎えにくるまで楽しそうに過ごしていた。

帰り際、「ししよさんになりたい!」と言われた時はとても嬉しかった。

なのはもはにかみながら「じゃあ頑張らないとね」とヴィヴィオの頭をなでていた。

そこに家族の温もりを確かに見た。きっと彼女らは大丈夫だ。

ヴィヴィオが司書の資格を取り、しばらくたった頃、1冊の本を持ってきた。

未整理区分にいれられていた本だが、内容がまったく分からないでどこに整理すればいいか迷っているとのことだった。

既知感を覚えながらその本を見せてもらうと、やはりあの本だった。

古代ベルカ語でもない未知の言語……忙しさの中で記憶の底に埋もれてしまっていたが、そろそろ本格的に調べる必要があるそうだ。手渡される時、彼女は何故か不安そうな表情を浮かべていた。

「なんだか怖い」とも口にし、僕は「大丈夫だよ」と微笑んだ。

自宅にあるあらゆる資料をあさり、ようやく本の正体にたどりつく。

どうやら観測指定世界の遺跡にあった粘土板の文字を写したものらしい。

つまり写本の一つなのだが、何故かなにぶん古い資料で信憑性に欠けるが 翻訳したという記録と対となる翻訳書があるというのに、それが書庫にない。

極めつけは誰が解読し、無限書庫に写本を持ち込んだのかも一切不明だった。

ただ大まかな内容だけは分かった。その地に住んでいた人々が信仰していた土着の神 『RHANTEGOTH』、ラーンテゴスと読むのだろうか？ について記したものらしい。

考古学上の興味は尽きないが、あの時のヴィヴィオの表情が頭か

ら離れない。

……触れるべきではない。そういう類のものだ。

解読はせず厳重に封をし、明日無限書庫の厳重管理区域に放り込むことに決める。

ヴィヴィオにこのことを告げると、彼女も安心したように胸を撫で下ろしていた。

本を戻し、数日が経った頃フェイトから依頼を頼まれた。

ある研究者が非合法の実験をしていたのを摘発したのだが、どうにも要領を得ないらしい。

曰く「私は神のために彼らと私を捧げたのだ」と。

その神の名をうわ言のように繰り返しているらしく、それを調べれば何かしらのヒントを得られるのでは、とのことだった。

けれどその神の名を聞いて僕は眉をひそめた。

「ラーン」テゴスだなんて聞いたこともない名前なんだけど、分かる？」

「……調べてみるよ」としか僕はフェイトに返せなかった。あの本を読み解かなければいけないのだと、溜息と共に悟った。

スクライアの人間と知り合いの考古学者にも協力を得て、写本の解読にあたる。

巻き込んでしまう、との危惧はあった。だが僕一人で解読出来る自信もなかったのだ。

……いや、やはり恐ろしかったのだらう。卑小な存在だと、僕は自分自身を呪った。

ほんの一部、ライン・テゴスに関係する部分だけ解読に成功する。そう、ほんの一部分だけだ。だというのに危惧していた事態は起きた。

考古学者の1人が体調を崩し、医務室に運ばれた。数日間謎の高熱に見舞われ、なんとか回復したものの彼には解読班から降りてもらった。

彼は「二度とゴメンだ」と愚痴をこぼし、「気をつける」と言い残して去った。

解読が済んだのはそれから3日後だった。その時までさらに2人が医務室送りとなった。

……僕も、頭痛が止まらない。

フエイトに資料を渡す。その内容に嫌悪を隠そうともしなかった。「こんなもののために……」そう呟くフエイトは憤っていた。

裁判の結果、精神薄弱からの殺人ということで責任能力は問えず、研究者は病院送りとなった。

今でも壁に向かってあの神の名を呟き続けているらしい。

僕はといえば何とか頭痛は治ったものの、数週間の休暇を取ることにした。

周りからも「有休が溜まっている」とのことだったのでちょうど良かったのかも知れない。海鳴にでも行こうと思う。あそこならゆつくり出来るはずだ。

ちなみにあの本は厳重封印の上、さらに厳しい管理区画に放り込んだ。もう2度と人目につくことはないだろう。

そこでふと思ってしまう。もしかしたら、無限書庫にあの写本を持ち込んだ人物は僕と同じことを考えたのだろうか、と。



長らく書庫が未整理だったのも本当は

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0693p/>

---

無限書庫に眠るもの

2010年11月22日17時26分発行